

## 平成 29 年度腐食防食学会 受賞者選定経過報告

表彰選考委員会  
委員長 山本正弘  
(但し、岡本剛記念講演選考を除く)

本会では、腐食防食の分野における学術および技術の進歩発展に顕著な貢献をした会員に対して学会賞、腐食防食の分野における学術の進歩発展に顕著な功績をあげている者を講師として、会員の知識と興味を高める権威ある講演とする岡本剛記念講演、腐食防食の分野における学術の進歩発展に功労のある会員に対して学術功労賞、腐食防食の分野における技術の進歩発展に功労のある会員に対して技術功労賞、優秀な学術論文に対して論文賞、優れた技術に対して技術賞、優秀な若手の会員に対して進歩賞、加えて本部ならびに支部の事業発展に貢献した会員に対して功績賞、貢献賞を贈り表彰してきている。平成 29 年度で、学会賞は第 20 回(含む協会賞)、岡本剛記念講演は第 21 回、学術功労賞および技術功労賞は第 2 回、論文賞と技術賞は第 38 回、進歩賞は第 31 回となる。

本会の規定に従い、表彰選考委員会内に、学会賞選考委員会(委員長 山本正弘)、岡本剛記念講演講師選考委員会(委員長 原 信義)、学術功労賞選考委員会(委員長 鈴木俊一)、技術功労賞選考委員会(委員長 細谷敬三)、論文賞選考委員会(委員長 片山英樹)、技術賞選考委員会(委員長 市場幹之)、進歩賞選考委員会(委員長 春名 匠)を設け、功績賞、貢献賞については総務会にて平成 28 年 10 月から平成 29 年 1 月にわたって慎重に審査を行ってきた。その結果、推薦された候補者から、学会賞 1 件、岡本剛記念講演 1 件、学術功労賞 2 件、技術功労賞 2 件、論文賞 2 件、技術賞 1 件、進歩賞 2 名、功績賞 4 名、貢献賞 6 名が選考された。

### <学 会 賞>

#### 腐食抑制剤の作用機構に関する基礎的研究

— 65 年の研究を振り返って —

荒牧國次(慶應義塾大学名誉教授)



荒牧國次

#### 【略歴】

荒牧國次君は昭和 28 年に慶應義塾大学工学部応用化学科卒業、昭和 30 年に同大学大学院工学研究科修士課程修了後、工学部助手、同専任講師を経て、昭和 39 年に工学部助教授、昭和 41 年に博士号を取得。同年テキサス大学博士研究員。昭和 46 年より慶應義塾大学工学部教授、昭和 56 年より理工学部化学科教授として活躍し、平成 9 年から同大学名誉教授。本会では、評議員、出版委員長、理事、監事などを歴任。

#### 【業績】

荒牧國次君は腐食抑制材の作用機構の解明について一貫して基礎研究を続け、酸塩基の硬さを指標とした作用機構の提示や、自己組織化皮膜の研究など、非常に新しい視点での研究成果を出し続け、この分野の学術の発展に顕著な業績を残している。また特筆すべきは、本誌「材料と環境」に 20 編を超える解説、約 50 編の論文を執筆・投稿していることであり、本会の役員や委員長を歴任したことと合わせて、本会発展に対する貢献は非常に素晴らしいものである。以上により、本会学会賞に授与するにふさわしい人物である。

## 岡本剛記念講演

### 生体環境における金属表面状態とその制御

埴 隆夫(東京医科歯科大学)



埴 隆夫

#### 【略歴】

埴 隆夫君は昭和 56 年 3 月北海道大学工学部金属工学科卒業。平成元年に歯学博士，平成 10 年に博士(工学)取得。北海道大学助手，徳島大学助教授，物質・材料研究機構生体材料研究センター副センター長を経て，平成 14 年より東京医科歯科大学生体材料工学研究所教授，現在に至る。

## <学術功労賞①>

### 構造材料及び機能材料の環境劣化過程の研究

野田和彦(芝浦工業大学)



野田和彦

#### 【略歴】

野田和彦君は平成 4 年 3 月東京工業大学大学院理工学研究科金属工学専攻博士課程修了，博士(工学)取得。北海道大学，東京工業大学，金属材料技術研究所(現物質・材料研究機構)，電力中央研究所に勤務した後，平成 17 年 4 月芝浦工業大学に入職，現在に至る。

#### 【選考理由】

野田和彦君は 30 年以上にわたり腐食防食を中心とした研究に従事し，鉄不働態皮膜の解析，アルミニウム合金基複合材料の環境劣化をはじめ，多くの構造材料および機能材料の環境劣化過程を基礎的・学術的な視点から研究し，電気化学会論文賞，英国腐食協会 T. P. Hoar 賞を受賞した。また，実用材料の観点から，生体材料，原子力材料，構造用鋼，電子機器材料などの腐食について広く研究し，その成果は多くの応用的な社会貢献を果たしてきた。特に，大気腐食性の評価における交流インピーダンス法を含めたモニタリング技術と表面観察法に代表される表面の可視化技術は，この分野における材料開発・材料の長寿命化の飛躍的な発展に大きく貢献した。以上の理由により，同君の業績は腐食防食分野における学術の進歩発展に大きく貢献しており，本会学術功労賞を授与する。

## <学術功労賞②>

### 海洋・大気環境の腐食性評価法の確立

元田慎一(東京海洋大学)



元田慎一

#### 【略歴】

元田慎一君は昭和 61 年 3 月東京商船大学(現東京海洋大学)大学院修士課程修了。平成 14 年 3 月博士(工学)取得(東京大学)。職歴は昭和 61 年 4 月東京商船大学助手、講師、助教授を経て、平成 19 年 4 月東京海洋大学教授。平成 25 年海洋電子機械工学科長、平成 28 年海洋工学部教務委員長を兼務。大学に就職して以来、一貫して海洋環境における鋼材の腐食防食ならびに微生物活性を利用した電池の教育研究業務に従事。この間、昭和 63 年東京大学工学部、平成 14 年マンチェスター理工科大学、平成 19 年デラウェア大学に訪問研究員として在籍。本会では、論文賞受賞(2 回)、編集委員、会計理事、住宅環境における腐食分科会主査を歴任。

#### 【選考理由】

元田慎一君は海水中微生物腐食の研究過程で着想を得て、光電極を組み込んだ海洋微生物燃料電池を開発した。また、Fe/Ag- 対からなる ACM(Atmospheric Corrosion Monitor)センサについて、その開発当初から携わり、海洋性大気を含めた大気環境の腐食性を定量的に評価する手法を確立した。海洋分野などにおいては、放射性誘起表面活性効果を利用し、酸化チタンなどのすきま腐食抑制効果を評価した。これらの成果は、海洋、大気と幅広い分野における腐食評価に大きく貢献し、かつ海洋構造物分野へ腐食防食技術の適用を拡大した。以上の理由により、同君の業績は腐食防食分野における学術の進歩発展に大きく貢献しており、本会学術功労賞を授与する。

## <技術功労賞①>

### 電気・通信分野における防食技術の開発と普及

半田隆夫(エヌ・ティ・ティ・アドバンステクノロジー株式会社)



半田隆夫

#### 【略歴】

半田隆夫君は昭和 61 年 3 月北海道大学大学院工学研究科金属工学専攻修士課程修了。同年 4 月日本電信電話株式会社に入社以来、ほぼ一貫して通信用設備・装置・部品の材料面からの高信頼化技術開発に従事。その間、粉体塗装を中心とした屋外通信設備の防食技術に関する研究により平成 9 年 3 月博士(工学)取得(北海道大学)。平成 26 年 4 月 NTT グループ会社のエヌ・ティ・ティ・アドバンステクノロジー株式会社入社。材料分析センタ長などを務め、現在に至る。

#### 【選考理由】

半田隆夫君は、通信会社での一連の研究開発業務の傍ら、屋外通信設備の腐食と防食に関する研究を長年行い、耐食性に優れた粉体塗装の適用技術の開発と普及に努め、屋外通信インフラの長寿命化と信頼性向上に寄与した。以上の成果は講演大会や本誌でも公開し、あわせて研究事業委員長として腐食防食技術の啓蒙活動に貢献するなど、本会での功績は顕著である。以上の理由により、本会技術功労賞を授与する。

## <技術功労賞②>

### 大気腐食の高精度評価技術の開発とその普及

藤井和美(株式会社日立製作所)



藤井和美

#### 【略歴】

藤井和美君は昭和 63 年 3 月東京理科大学大学院理学研究科化学専攻修士過程終了。同年 4 月株式会社日立製作所に入社し、日立研究所(現研究開発グループ材料イノベーションセンタ)に配属され、電子機器、家電製品、発電プラント機器などの耐食性評価および腐食防止技術に関する研究・開発に従事し、現在に至る。平成 20 年 9 月博士(工学)取得。平成 24 年 1 月腐食防食専門士。平成 24 年 4 月スガウエザリング技術振興財団特別技術功労賞を受賞。平成 26 年 5 月腐食防食学会技術賞を受賞。

#### 【選考理由】

藤井和美君は、電機会社での一連の研究開発業務の傍ら、大気腐食の評価試験法に関する研究を長年行い、高精度評価技術としての QCM 法をエレクトロニクス材料の腐食モニタリング技術に実用化した。あわせて、家電製品に用いる表面処理鋼板や軽金属の大気腐食現象を再現できる新たな大気腐食試験方法を開発した。以上の成果は、本誌で公開することはもちろん、国際規格化を通じた技術の普及にも貢献しており、本会での功績は顕著である。以上の理由により、本会技術功労賞を授与する。

## <論文賞①>

### 乾湿繰り返し試験におけるステンレス鋼すきま部の腐食挙動 —すきま内環境の評価—

平出信彦(新日鐵住金ステンレス株式会社)  
梶村治彦(新日鐵住金ステンレス株式会社)

坂本俊治(日鉄住金テクノロジー株式会社)



平出信彦



坂本俊治



梶村治彦

#### 【略歴】

平出信彦君は平成 1 年 9 月東北大学大学院工学研究科金属工学専攻修士課程修了、同年 10 月住友金属工業株式会社入社。平成 15 年 10 月新日鐵住金ステンレス株式会社に異動。平成 24 年東北大学にて博士(工学)取得、現在に至る。

坂本俊治君は昭和 57 年 3 月金沢大学大学院工学研究科工業化学専攻修士課程修了。同年 4 月新日本製鐵株式會社(現新日鐵住金株式会社)入社、技術開発本部八幡技術研究部において主に油井管腐食の研究、高耐食性油井管の開発、自動車用ステンレス鋼の開発に従事。平成 14 年 3 月九州大学大学院工学研究科材料工学専攻博士課程修了、博士(工学)取得。平成 25 年日鉄住金テクノロジー株式会社に移籍。金属材料の破損診断解析、材料評価に関する業務に従事し現在に至る。

梶村治彦君は昭和 56 年 3 月大阪大学大学院工学研究科金属材料工学専攻修士課程修了。同年 4 月住友金属工業株

式会社入社，中央技術研究所にて耐食ステンレス鋼開発の業務に従事し，平成4年に大阪大学にて博士(工学)取得。平成15年10月新日鐵住金ステンレス株式会社発足と同時に移動，現在に至る。

**【選考理由】**

スポット溶接により形成したすきま部について，乾湿繰り返し試験を噴霧時間と噴霧溶液濃度を変化させて行い，試験後のすきま内水溶性成分の分析や乾湿繰り返し試験におけるすきま部の腐食環境評価から腐食特性とすきま内環境との関係を検討した論文で，乾湿繰り返し環境は水溶液環境とは異なり，すきま内はNaClとFe, Crからなる金属塩化物との混合環境にあることを明らかにしている。また，すきま内のCl量が約 $20\text{mmol}\cdot\text{m}^{-2}$ に到達すると，サイクル数とともに最大腐食深さが増加することを明らかにしている。本論文は完成度が高く，新規性・独創性に富み，研究の発展性・将来性も期待される。よって，論文賞として推薦する。

**<論文賞②>**

**ステンレス鋼の溶接ヒートティント部の局所電気化学挙動**

河野崇史(JFE スチール株式会社)  
梶山浩志(JFE スチール株式会社)  
伏見公志(北海道大学)

石井知洋(JFE スチール株式会社)  
木村光男(JFE スチール株式会社)



河野崇史



石井知洋



梶山浩志



木村光男



伏見公志

**【略歴】**

河野崇史君は平成12年3月大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻博士課程修了，博士(工学)取得。日本学術振興会特別研究員を経て，平成13年4月NKKに入社し基盤技術研究所に配属。平成15年よりJFEスチール株式会社スチール研究所に所属。鉄鋼材料の解析技術に関する研究および表面処理鋼板を中心とした材料の研究開発に従事し現在に至る。

石井知洋君は平成15年3月京都大学大学院理学研究科化学専攻修士課程修了。同年4月，JFEスチール株式会社入社。ステンレス鋼の研究開発業務に従事し，現在に至る。

梶山浩志君は平成3年3月京都大学大学院工学研究科冶金学専攻修了，同年4月日本鋼管株式会社に入社。鉄鋼研究所に配属され，表面処理鋼板などの鉄鋼材料の耐食性解析や評価技術に関する研究・開発に従事。平成15年4月にJFEスチール株式会社となり，スチール研究所に配属。平成23年3月博士(工学)取得(東北大学)。現在に至る。

木村光男君は昭和56年3月大阪大学大学院工学研究科溶接工学専攻修士課程修了。昭和56年4月川崎製鉄株式会社(現JFEスチール株式会社)入社，鉄鋼材料の耐食性と水素脆性に関する研究に従事。平成14年1月大阪大学工学部にて博士(工学)取得。平成27年9月より東京大学生産技術研究所特任教授，現在に至る。

伏見公志君は，平成4年3月北海道大学大学院工学研究科応用化学専攻修士課程修了。平成4年4月より平成7年7月まで東洋製罐株式会社に在籍。平成7年8月より北海道大学工学部助手，平成19年4月より北海道大学大学院工学研究科助教，平成20年4月より北海道大学大学院工学研究科准教授，現在に至る。この間，平成13年12月博士(工学)の学位を受ける。平成14年4月より平成15年7月まで独国マックス・プランク鉄鋼研究所客員研究員。

### 【選考理由】

ステンレス鋼の溶接により生じたヒートテイント部について、マイクロキャピラリーセル法による局所電気化学測定技術と複合サイクル試験を適用し耐食性劣化機構を詳細に調査した論文で、Cr 欠乏層が溶接部寄り、Fe 系酸化皮膜はそれより外側寄りに存在することを明らかにしている。また、耐食性劣化機構について、Cr 欠乏層は孔食電位の低下、Fe 系酸化皮膜は CCT での発錆に影響しており、そのメカニズムが異なることを明らかにしている。本論文は完成度が高く、新規性・独創性に富み、研究の発展性・将来性も期待される。よって、論文賞として推薦する。

## <技術賞>

### 自動車の防錆技術を革新する耐食性迅速評価法の開発とその実用化

浅田照朗(マツダ株式会社) 重永 勉(マツダ株式会社)  
磯本良則(広島大学)



浅田照朗



重永 勉



磯本良則

### 【略歴】

浅田照朗君は平成 21 年 3 月九州大学大学院総合理工学府物質理工学専攻博士後期課程修了，博士(工学)取得。他社を経て，平成 23 年 12 月マツダ株式会社入社，平成 23 年より防錆技術開発業務に従事し，現在に至る。

重永 勉君は昭和 57 年 3 月マツダ株式会社入社，技術研究所に配属。その後，一貫して自動車用の防錆材料(表面処理鋼板/塗装/シール材など)やこの性能評価技術および自動車防錆品質育成プロセスの開発業務に従事し現在に至る。

磯本良則君は昭和 53 年に広島大学工学部化学工学科卒業，昭和 61 年にスラリーエロージョン・コロージョンの解析とその評価に関する研究にて博士(工学)取得(東京工業大学)。株式会社松田ポンプ製作所研究員を経て昭和 58 年に広島大学助手，ケンブリッジ大学客員研究員を経て，平成 3 年に広島大学助教授(現准教授)，現在に至る。エロージョン全般の研究，エロージョン・コロージョンの再現と機構解明に関する研究に従事。近年は塗装鋼板の耐食性評価，装置材料の腐食モニタリング，金属材料の孔食・応力腐食割れの再現などを行っている。

### 【選考理由】

本技術は，影響要因が多岐にわたる自動車の防錆品質の短時間高精度の評価技術を開発したものである。従来は長時間の促進腐食試験で評価を行うことから，製造現場に適用して製品の防錆品質をその場で判断し効率的に育成，管理することは難しかった。本技術は数分の短時間で製品の防錆品質のその場評価を可能として，車両防錆品質の育成，管理プロセスの革新を実現した。本技術は，製造現場での製品の品質管理，新材料の評価，製造プロセスの開発などで活用され十分に実用性を有することが確認されている。自動車の車体防錆品質における永年の腐食課題に取り組み解決に資する工業技術を提供した功績は大きい。調査から実用化に至る技術の詳細を本会などでその都度公表し，特許出願や計測装置の製品化も完了しており技術の普及にも貢献している。以上の理由により，本会技術賞を授与する。

## <進歩賞①>

### 遺伝子解析を用いた微生物腐食診断技術の開発

若井 暁(神戸大学)



若井 暁

#### 【略歴】

若井 暁君は平成 17 年 9 月岡山大学大学院自然科学研究科エネルギー転換科学専攻博士後期課程修了, 博士(学術)取得. 同年 10 月より独立行政法人製品評価技術基盤機構研究職員, 平成 21 年 4 月より広島大学大学院生物圏科学研究科研究員, 平成 25 年 1 月より神戸大学自然科学系先端融合研究環特命助教, 平成 28 年 4 月より神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科特命准教授, 現在に至る.

#### 【選考理由】

若井 暁君は微生物腐食の研究を生物学的な見地から取り組み, 遺伝子解析と微生物培養を組み合わせる新しい腐食性微生物を発見している. また, 腐食性微生物を遺伝子解析によって検出する新規な方法の開発も行っている. さらに, これらの研究成果を本誌に投稿するとともに, 講演大会や腐食防食シンポジウムなどに数多く公表しており, 本会への学術的貢献は極めて大きい. したがって, 今後の腐食防食分野をリードする新進気鋭の研究者として, その活躍が大いに期待される. これらの業績は進歩賞の授与に相当すると判断し, 進歩賞選考委員の全員一致でここに推薦する.

## <進歩賞②>

### 電気化学的手法による銅および銅合金の新規腐食診断法に関する研究

星 芳直(東京理科大学)



星 芳直

#### 【略歴】

星 芳直君は平成 24 年 3 月東京工業大学大学院理工学研究科材料工学専攻博士課程修了, 博士(工学)を取得. 同年 4 月より東京理科大学理工学部工業化学科助教, 現在に至る.

#### 【選考理由】

星 芳直君は, 電気化学測定を駆使した淡水中における銅の腐食診断法や電気化学インピーダンス法を利用した銅合金の腐食進展速度の評価法などの新規性に富んだ腐食評価法の開発に取り組んでいる. また, これらの研究成果を本誌に投稿するとともに, 講演大会などに数多く公表しており, 本会への学術的ならびに技術的貢献は極めて大きい. さらに, 講演大会の実行委員やコンペティションセッション審査員など学会運営にも積極的な貢献がみられる. したがって, 今後の腐食防食分野をリードする新進気鋭の研究者として, その活躍が大いに期待される. これらの業績は進歩賞の授与に相当すると判断し, 進歩賞選考委員の全員一致でここに推薦する.

## <功績賞>



大澤基明

### 【略歴】

大澤基明君は昭和51年早稲田大学大学院理工学研究科資源および金属工学専攻修士課程を修了。東京電機大学工学部助手、講師、助教授を経て、平成7年教授。早稲田大学より工学博士を授与。ステンレス鋼の水素損傷、粒界腐食、レーザ熱処理による耐食性の改善などの研究を行う。日本ばね学会副会長。本会では分科会委員および主査、委員会委員および委員長、編集委員会委員、評議員、材料と環境講演会実行委員長などを歴任。



原 信義

### 【略歴】

原 信義君は昭和52年3月東北大学大学院工学研究科金属工学専攻博士課程前期2年の課程を修了後、同大学工学部助手、助教授を経て平成15年4月同大学工学研究科教授に昇任。金属の不働態と局部腐食発生機構の解析を中心にして腐食科学・工学に関する広範な研究と教育に従事。平成24年4月から東北大学理事として、東日本大震災からの復興に向けた全学的取組の企画・推進に当たる。本会では編集委員長、理事、副会長、会長などを歴任。



吉葉正行

### 【略歴】

吉葉正行君は昭和50年3月東京都立大学大学院工学研究科機械工学専攻修士課程を修了後、同年4月同大学工学部助手、昭和60年4月博士(工学)、昭和61年10月同助教授を経て、平成11年4月東京都立大学大学院工学研究科教授。平成17年4月首都大学東京大学院理工学研究科教授。平成28年3月同大学を定年退職。現在、公共投資ジャーナル社論説主幹、トーカロ株式会社取締役。高温材料の腐食防食ならびに複合型損傷解析に関する一連の研究を通して高温材料システム保証学研究所を展開。最近では特に環境-エネルギー問題を中核とする循環型社会環境システム工学に関する研究と啓発活動を展開中。本会では、論文賞、技術賞(3回)などを受賞、岡本剛記念講演講師、コロージョン・セミナー企画委員会主査、理事、監事などを歴任。現在、高温材料システム分科会主査として分科会ならびに「環境-エネルギーフォーラム」を企画運営し、全国行脚している。



林 安徳

### 【略歴】

林 安徳君は昭和39年4月東京大学大学院数物系研究科応用物理学専攻修士課程修了。昭和41年4月同大学院博士課程中退で同工学部助手に就任。博士(工学)取得。昭和48年8月九州大学講師就任。昭和58年九州大学教授に就任して金属表面化学、表面および薄膜工学の教育、研究に従事。平成14年定年退職、現在に至る。平成13年本会会長、平成16年同名誉会員。



## <貢献賞>



南條 弘



富塚 功



河野浩三



林 修平



鈴木昌己



植田昌克

### 【略歴】

南條 弘君は昭和 61 年 3 月東北大学大学院工学研究科機械工学第二専攻博士課程後期 3 年の課程修了，博士(工学)取得。昭和 61 年 4 月通商産業省工業技術院東北工業技術試験所入所，高温高速気液二相流中のエロージョン・コロージョン挙動の解明に従事。その後，腐食挙動のマイクロ観測，金属表面バリア膜の原子レベル平坦化，金属表面の多孔質化とセンサーや太陽電池への応用に従事。平成 22 年より粘土膜やグラフェンの応用や研究連携の業務に従事，現在に至る。

富塚 功君は，昭和 35 年横浜国立大学工学部化学工業科を卒業後，北海道炭鉱汽船株式会社に入社，石炭科学研究所へ配属。昭和 37 年に同社を退社後，昭和 38 年横浜国立大学臨時教員養成所助手として採用され，同年通産省工業技術院資源技術試験所に出向し，石炭乾留の研究に従事。昭和 39 年に科学技術庁金属材料技術研究所に出向後，炭素材料やニッケル基合金の高温酸化や腐食研究に従事，平成 10 年に退官。同年 4 月より科学技術振興事業団海外派遣研究員に採用され，Institute for Sorption and Problems of Endoecology や National Academy of Sciences of Ukraine へ派遣され，チェルノブイリ事故に伴う汚染の除去の研究に従事，平成 13 年に任期終了，現在に至る。

河野浩三君は昭和 50 年住友軽金属工業株式会社に入社，同年研究部銅合金研究室(現株式会社 UACJ 技術開発研究所)に所属，平成 28 年まで 42 年間一貫して銅の腐食・防食に従事。この間，給湯用や空調用をはじめとする銅，銅合金の 5000 件以上の腐食事例調査を実施。平成 16 年から中央式循環給湯システムの銅管で経験される潰食ならびに II 型孔食発生について給湯システムとの観点から実態調査を開始し，これらの腐食が密閉式貯湯槽を使用した建物で発生し，ガスが抜けやすい開放式貯湯槽を使用した建物では 20~40 年間の長期わたって未発生であることを明らかにした。平成 19 年主任研究員。平成 25 年に給湯水中の溶存酸素濃度を給水中のそれより低くすることで潰食の発生が抑制されることを実験で明らかにし，実際の建物で実証した。平成 27 年，銅管(りん脱酸銅，無酸素銅)に発生する蟻の巣状腐食対策材を開発し，平成 28 年日本銅学界第 50 回論文賞受賞。

林 修平君は昭和 50 年 3 月姫路工業大学(現兵庫県立大学)工学研究科金属材料工学専攻修了，修士(工学)取得。同年 4 月株式会社タクマ入社。播磨工場にて生産技術業務につく。昭和 63 年設計部門に異動，産業廃棄物焼却炉の設計業務に従事。平成 8 年以降既納プラントのメンテナンス部門に異動，関連会社運転管理業務を兼務。入社初期より社内腐食損傷事例の解析ならびに対策に従事。平成 27 年 3 月退社，同年 4 月より株式会社環境ソルテック入社，現在に至る。

鈴木昌己君は昭和 48 年 3 月桐蔭工業高等専門学校工業化学科卒業。同年 4 月日本防蝕工業株式会社入社，船舶部，研究部に所属しバラストタンクの電気防食研究を担当。その後，技術部に配属され発電所，化学プラント関係の電気防食設計に従事。平成 20 年大阪支店技術部長，平成 23 年執行役員大阪支店副支店長を勤めた後，現在調査役の任にある。

植田昌克君は昭和 56 年 3 月大阪大学大学院理学研究科無機および物理化学専攻修士課程を終了後，同年 4 月住友金属工業株式会社(現新日鉄住金株式会社)入社。平成 7 年 9 月，大阪府立大学工学部にて博士(工学)取得。平成 27 年 12 月末退職。現在は NACE International，ISO 規格化の委員およびコンサルタントとして活動。一貫して熱力学的手法での湿潤 CO<sub>2</sub>-H<sub>2</sub>S 環境の油井管およびラインパイプの耐食性機構解明および材料開発の研究に従事。学協会活動は国際的で，NACE International より平成 18 年に F. N. Speller 賞を受賞し，平成 25 年にはフェロー(FNACE)になっている。国内では，金属学会技術開発賞を 4 回受賞。本会では平成 4 年に論文賞を受賞し，平成 23 年から 26 年まで国際交流委員会の委員長を務めた。